

Lymanより島田純一に贈られた一冊の本 A book presented to Shimada Junichi from Lyman

金 光男¹⁾・浜崎 健児²⁾

1. はじめに

筆者の一人金は、お雇い外国人地質学者Benjamin Smith Lyman (以下ライマン: 1835-1920: 矢部, 1953; 今井, 1966, 1982; 鈴木・小玉, 1990: 副見1990ほか)の業績について科学史的見地より研究している(Suzuki and Kim, 2003; 金, 2003, 2007a, b; 金・菅原, 2007; 金・紺谷, 2008など)。調査の過程において、地質学史的に重要と思われる一冊の本が見出された。これを以下「島田本」と称する。

島田本は、浜崎が、神田の古書店において、店頭で平積されていたものを発見し、急ぎ入手したものであった。幾つかの偶然の積重なりにより、筆者らの手元に辿り着いた島田本であるが、これについて調査したと

ころ、ライマンを巡る興味深い人間模様が、明治～平成の時を超え、鮮やかに展開されることが明らかとなった。「地質の日」元年特集号の刊行に際し、その科学史的意義とエピソードについて報告する。

2. 1990年東京神田

12月のとある休日、神田古本街の老舗一誠堂の軒先で一冊の黒色革装洋書が浜崎の目にとまる。実はその数ヶ月ほど前、同じ店頭において“Mineralogy of Rarer Metals”という赤色革装の希少金属鉱物に関する、文字通り“レア本”を発掘していたのであった。彼にはまた何か面白そうなものが見付かりそうな予感があった。



第1図 ライマンと彼の門弟“Young Men”たち。前列左端 島田純一 1880年
平河町ライマン邸にて(副見, 1999より)。

1) 自然地質環境研究所 (GEL)
191-0002 東京都日野市新町1-2-23-201
2) 株式会社 小松製作所 (コマツ)

キーワード: ライマン, 島田純一, トラウトワイン, 梶原仲治, 梶原
(島田)ウメ, 安部正夫, 安部(梶原)玉枝, 安部謙二,
内村鑑三, 1877 (明治10)年

店頭に並ぶ箱の中に、黒色革製、三方小口金色塗装による変わった古洋書があった。小口部全体を革カバーで囲いこむ形態からなる珍しい装丁である。鉛筆などの筆記具を蝶番式にカバー内側に納める工夫もこらされ、最初から携帯することを目的として作られた、実用性を重視したものだった。タイトルには“Civil Engineers Pocketbook”（土木工学エンジニア向けハンドブック）とある。工学便覧の類であろう。筆者の関心領域（浜崎, 2002, 2006）である鉱物学・地質学とは直接関連しないことから、「ちょっと外れかな?」とも思った。

それでも、折角だから少し詳しく観察してみようと思い直し、本を開こうとすると、表紙見返し部に記される英文署名がいきなり目に飛び込んで来た。J. Shimada Esq. … 「シマダ?」「島田?」… 日本人に与えた本らしい。欧米人から日本人へ贈られた署名入りの古書は珍しい。サインは力強い筆致によりLymanと書かれていた。さらにYedo (=江戸)の地名表記と、1877年1月1日の日付が添えられる。明治初期、東京にいた外国人でライマンとなれば、これは日本最初の広域地質図「日本蝦夷地質要略之図」(今井, 1963, 1979; 金, 2007b)を作成した日本地質学の恩人 Benjamin Smith Lymanに違いないと直感し、即購入を決定。心の興奮を押さえつつ、足早に店を出た。表紙扉に鉛筆で書いてある申し訳ない程の価格を支払って…

平河町で撮影された着物姿の門弟たちとライマンそして“唯一のトランシット”(西山, 1926)との記念写真(第1図)や、「来曼先生小伝」(桑田, 1937)にあるライマンと門弟たちの幾枚かの集合写真、「黎明期の日本地質学」(今井, 1966)に載せられる肖像などが、フラッシュバックのように脳裏に閃いた。ライマン門弟の中には確か島田の名があったはずである。

「黎明期の日本地質学」は学生時代よりの浜崎の愛読書で、地学史資料の中において基本知識を得るために最もお世話になった著作のひとつであった。もし本書と出会わなければ、和田維四郎ら、黎明期日本地質学研究者たちの業績に興味をもつに至らなかったであろう。ライマンのことも浜崎は本書により初めて知った。今井の記述に触発され、古書店で北海道地質図に関する、北大の佐々保雄教授の論文別刷を購入したこともあった。そのライマンが門弟の一人である島田純一に贈った本が偶然見つかったのである。

第1表 1874(明治7)年 開拓使仮学校 成績表
 (今津, 1979より)。

前田 精 明	賀 田 貞 一	三 沢 思 襄	山 際 永 吾	西 山 正 吾	島 田 純 一	坂 市 太 郎	斉 藤 武 治	氏 名 科 目
30	30	40	40	60	70	30	20	読法
48	57	50	45	53	70	48	57	綴字
57	66	69	84	91	89	63	—	文法
24	50	48	50	67	97	37	—	地理
69	—	—	66	80	60	84	—	算術
—	—	—	60	40	45	40	—	作文

明治七年試験成績表

3. 島田純一

お雇い外国人の総数は1874(明治7)年において最大数の524名を記録する。その内訳は学術教師が151名、技術指導者が213名であったとされる(上野, 1968)。お雇い外国人たちは自らの使命を自覚し、新生日本が立ち向かう一大改革に協力しようとする熱意ある人が多かった。そしてお雇い教師たちの中には、小泉八雲やモースのように、自分の知識を伝えるだけでなく日本文化を理解して、さらに世界に向け発信する国際文化使節の役割を果たす者さえいた。一方、学ぶ側も新国家建設の希望に燃え、先進科学技術の習得を目指した(金, 2008)。ライマンこそ前者の典型であり、そして島田純一は後者の典型だった。

島田は、1852(嘉永5)年周防国生まれ。長州藩藩校である明倫館に学んだ。1872(明治5)年、20歳のとき、開拓使仮学校に入学し、ライマンらと出会う。開拓使仮学校は札幌農学校の前身となる教育機関で、同年、東京 芝 増上寺の宿坊を譲り受け、御成門にあった開拓使庁に隣接し創設されたものだった。

…開拓使仮学校（札幌農学校の前身）に入学し…私など二十歳の時始めて英字を見た位である。体格ばかり大人で、學力は外國の少年以下の連中に教へるのであるから外國人の先生も随分骨が折れた、米人某教師は生徒の程度が低いと云って逃げた位である。弟子の身として恩師を評する不遜を許容して戴くなら——先生は極く真面目なジオロジストであり、非常に潔癖な人であった…最も敬服したのは公私の別を先生が非常に區別された事で、先生は常に鉛筆を二本所持してゐて、公用と私用とは別の鉛筆を用ひ、假令紙一枚たりとも官物を私用に供するやうな事は致さなかつた…（島田, 1926）

上掲した島田の回想には謙讓がある。彼はライマン門弟の中において、常に上位の成績を残したことが知られているからである。第1表における、島田の英語（読法・綴字・文法）などの成績に着目されたい、とくに、彼の地理学成績は他を圧する。

島田はライマンとともに、1873～1875年にかけて、石狩炭田群（とくに、島田は幌内炭田のほか、美唄炭田分布域の精査を担当した）を調査し、さらに1880（明治13）年には、幾春別炭田と奔別炭田を発見する有能な地質学者であった。石炭が発見され、それが近代工業プロセスにより生産されるようになって国内の消費地に届けられるまで、日本は薪炭を主要なエネルギー源としていた。“高エネルギー資源”である石

炭の発見は、重化学工業の発展を保障する、新生日本近代化に向けての力強い追い風となる（金・菅原, 2007）。

1882（明治15）年、夏尚寒い北国の苛烈な自然は、維新日本発展のため北海道の大地を駆け抜け調査していた、若き島田の片脚を奪い去る。ライマンから地質学を伝授されてからちょうど10年。まさに30歳の働き盛りを迎えようとしていた若い地質学者を凍傷の悲劇が襲ったのであった。

そのとき既に帰米していたライマンは、島田の不幸を我がごとのように悲しみ、そして島田の将来を氣遣った（副見, 1999）。ライマンの門弟たちは、僚友島田を生涯かけて支援する。彼ら師弟間に底流する高潔な哲学は、その後の「北大学派」の形成において、陰に陽に影響を与えたと推定されまいか。その支援の輪の中において、不屈の闘志によって島田は再起し、天の与えた試練に対し果敢に立ち向かう。

…^{かつび}恰度今の入山採炭株式會社の^{こうく}鑛區の隣鑛區であつた…足の悪い私はモッコに乗って鑛脈の調査をした。今でこそ常磐炭も三百萬噸近くも出炭をするやうになったが、其頃の常磐炭は實に微々たるものであつた、湯本から小名濱まで…『島田は足が悪いと云つて辭めたのであるが、あの位歩けるのならモウ一度役人になつたらどうか』と勧められた、成程辭める時は職務に堪えずと觀念してるが、不自由な足にも馴れるし寧ろ座食してゐるより



第2図 島田家 家族写真（副見, 1999；安部, 1998より）。

も働いてるの方が面白いし、^{みからだ}身體の為めにもよからうと考え、再び任官する事となった…
(島田, 1926)

島田は古巣の農商務省に復帰すると、たちまち鉱山課長に昇進し、1892(明治25)年農商務省福岡鉱山監督局に転任、そして1894(明治27)年同省東京鉱山監督長の職位に就く。そのとき、三池炭鉱事務長だった団 琢磨に、その実力を見込まれ、自分の後任となるよう依頼されると、熟考の末同年11月をもって三井へ移る。

三井入社後の島田は、まさに八面六臂の活躍をする(団, 1926)が、1909(明治42)年8月、頼りとしていた残る左脚を痛めて歩行困難となる。在職を慰留する会社が渋々島田の退社願いを受理すると、彼は故郷の山口県能毛^{むらつみ}室積に隠退する。

4. ライマン-島田-ウメ

島田純一は二女と一男のいる幸せな家庭に恵まれた(第2図)。この写真の前列に座る^{こうろう}好々爺が島田。後列の左端に立つ女性が、長女のウメである。

島田の娘たちは華族女学校(学習院女子部の前身)を卒業する。華族女学校の校長には工部大学校の初代校長をつとめた大鳥圭介がいた。かつてライマンとその門弟たちは工部省に在籍して、上司大鳥の激励のもと、全国油田調査を敢行した経緯がある(今井, 1966; 徳永, 2001; 金・菅原, 2007)。ライマンと門弟たちとの間には、あたかも親子のような強い心の繋がりがあったことが報告されている(鈴木, 1949)。ここにも、人格者ライマンを介して結び付けられた、大鳥圭介-島田純一という“幕末～明治男の熱い人脈”が明瞭となる。

明治10年生まれの子山形県吹浦村出身者に、北海道の監獄給仕を経てその後故郷で米屋を興し、そこで原資を蓄えて上京。小学校の代用教員などをつとめながら、苦学の末一高を経て東京帝国大学法科大学を26歳で卒業した立志伝中の男性、梶原伸治がいる。晩年において、彼は横浜正金銀行(現在の三菱東京UFJ銀行)と勧業銀行(現在のみずほ銀行)の頭取を歴任する。

苦学生時代、梶原は島田家の家庭教師をつとめた。同じ苦学人であった島田純一は、梶原に一脈感じていただろう。卒業すると梶原は日本銀行に入行する。そして、島田家を訪ねると、ウメを妻に迎えたいと島田に懇願する。梶原とウメは大恋愛の末結ばれる。

1912(大正元)年、梶原は日本銀行ロンドン支局監督を命じられ、家族とともに10年にわたり英国に赴任する(第3図)。恰幅の良い男性が梶原、帽子姿の目元涼しい女性がウメである。史実と対照し、さらに第2図と第3図を比較検討することにより、ふたりのウメは同一人物であることが確認される。

梶原家は二人の女子に恵まれた。第3図において、ウメに寄り添う娘が次女の玉枝(1907-1983)である。その後、神戸の海運業安部家に嫁ぎ、やがて“扉の中の住人”となる次男坊に苦勞させられる。



第3図 梶原忠治とウメ。1921年ロンドンで撮影。

5. ライマンの贈りもの

金・菅原 (2007) は、ライマンを“優れた開拓期調査者” (Excellent Frontier Surveyor) と定義されるとし、そして彼の野帳記載から、背骨の通った平等観、庶民に対する温かい思いやりの心、さらに人種や身分を超越した人間への慈しみ、が読みとれるとして、彼の人生哲学に、①“弱者を優しく思いやる精神”と、②“発展途上にある異国民に対する強い連帯感”のあることを指摘した。

ライマンが門弟の家系において、孫子の代まで尊敬され続けたことは有名な史実である (桑田, 1937 など)。ここではその詳細について言及する余裕はないが、ライマンの教育者としての優れた資質を示す、ひとつの象徴的史実を紹介する。

1876 (明治9) 年5月10日、ライマンらは「日本蝦夷地質要略之図」を刊行する。この日が「地質の日」に制定されたひとつの由縁である。同年12月25日 (クリスマス)

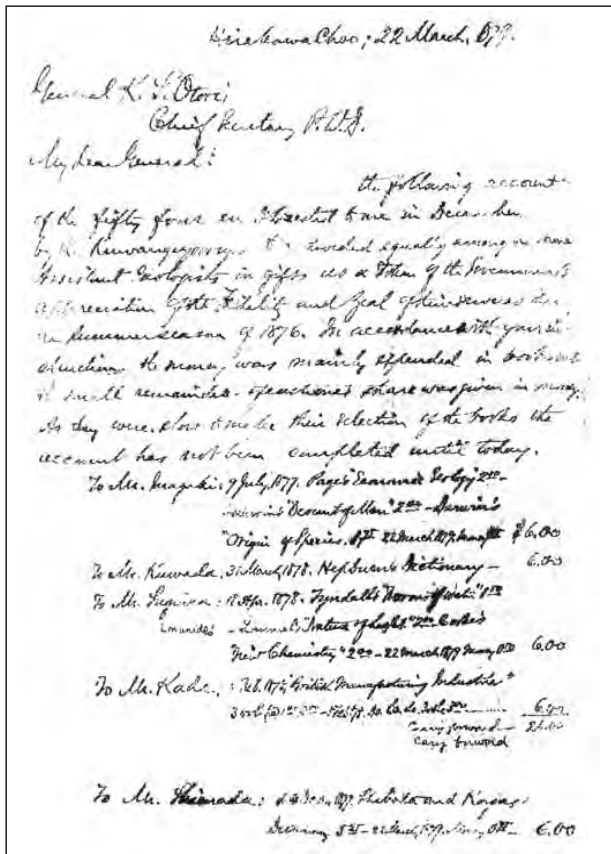
ス!), この快挙に対し、上司だった大鳥圭介は、ライマンと彼の門弟たちの功績を称え、各人に6米ドルの賞金を与えると通知する。米国のオイルラッシュ社会現象の視察から帰国したばかりの“国際人大鳥”の面目躍如たる、粋な聖夜のプレゼントだった。この計らいは、ライマンの「…将来を嘱望される青年には現金よりも6米ドル相当の書籍を与えるべきである…」とする申し出により、大鳥了承のもと、後日“Young Men” (第1図) たちに貴重な専門書が与えられることになる。

UMASS (マサチューセッツ大学) に保管されるライマン資料からひとつの史料を第4図に示す。1879 (明治12) 年3月22日付で大鳥宛に提出された贈呈本リストである。リストには、上より、稲垣徹之進、桑田知明、杉浦讓三、賀田貞一、島田純一の順に、ライマンから配られた書名が並ぶ。そのとき「…ダーウインの「種の起源」や「人間の由来」、ティンダルの「水の構成」、ヘボン辞書、その他、化学・工学・解剖・言語等に関する本…ほとんど英書…」が贈呈された (副見, 1992)。図より「種の起源」は稲垣に与えられ、また島田には辞書が与えられたことが理解される。

ここで感心させられるのは、全員への授与分が均等に6米ドル相当となるように、場合によっては複数の書籍を組み合わせ、あるいは総額に端数が出た場合には現金が加えられ、公平を欠くことのないようにライマンが配慮していることである。

当時日本では欧米で出版された専門書を入手することは夢のようなことであった。そんな時代、世界最高水準にあった名著を世界中から取り寄せて配分したライマンの心遣いについて、門弟たちが理解せぬはずがないだろう。彼らはその後いよいよ精進を重ね、そして、ますます恩師を尊敬したに違いない。

まして、それらに先立つかたちで、おそらくライマンが日本の正月風習である“お年玉”制度にならない、1877 (明治10) 年の元日において島田に贈った一冊のハンドブック。島田は梶原家に嫁ぐウメに「人生の恩人から貰った貴重極まりない一冊の本」を託す。つらいとき、悲しいことがあったとき、ウメもまた、この本を眺めては父を想い生涯を通じ励まされ続けたことだろう。



第4図 ライマンの贈呈本リスト (UMASS資料)。

6. ウメ-玉枝-讓二

ウメの孫にあたる安部讓二は、若い頃裏社会でその名を馳せていたが、後半生において作家へと転じ社会的地位を確立する。著作『秋は滲んで見えた』（1998）において、彼は祖母と母に対する思い出を切々と語る。その一部を以下に抜粋する。

祖母のウメのことは、亡くなったのが昭和32年でしたから、僕もはっきり覚えています。この年代の女の人としては、稀に見るほど朗らかで活発な婆様ばあさまでした。母・玉枝もほとんど同じ性格を受け継いでいます…

祖父と祖母に連れられた母が初めてロンドンに渡ったのは、大正元年ですから、五歳か六歳でした…

その当時の汽船王、山下亀三郎さんは、冗談で御自分のことを「箱屋」（三味線の箱をもって芸妓の供をする男）とおっしゃったほどの仲人好きです。祖父の…屋敷が向かい合っていたこともあって仲良しでした…たちまち見付けて来たのが、同じ海運業の神戸の安部家…安部正夫でした…

負けた日本にアメリカ軍を中心とする連合国軍が、進駐して来ました…祖母のウメと僕のいた家に、大きなアメリカ兵が五、六人、ドヤドヤと何か口々に喚きながら突然入って来ました。奥の離れでは恵子姉さんが寝ています。祖母の顔が途端に引き締まると、玄関からズイッと出て、アメリカ兵たちと相対したのです…アメリカ兵たちは怪訝な顔をしたのですが、その時に、祖母は低くて静かな声でなにか言いました…六人の中にふたりアメリカ陸軍の略帽を被った男がいて、その男たちは被っていた略帽を脱ぐと、両手で胸の前に握ったのです…彼らの様子を見て微笑んだ祖母が、また英語でなにかを言うと、それを聞いたアメリカ兵たちは、しきりと頷いてなにか答えると丁寧にお辞儀をして門から出て行ったのです…

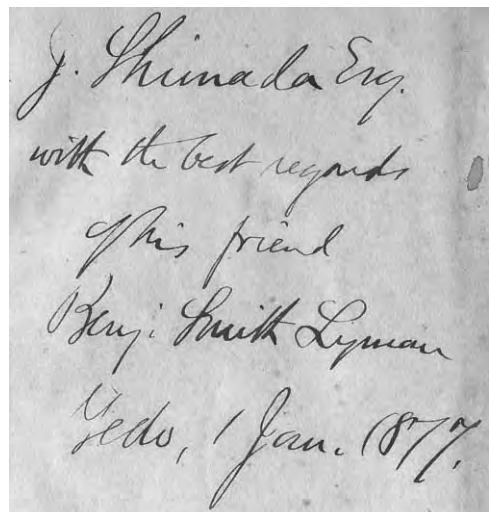
家の玄関に入ると、祖母はホッとしゃがみ込んでしまいました…桜があまり綺麗だったので、写真を撮らせてくれと入った家から、凄じ剣幕で飛び出してきた日本人の老婆が、ロンドン訛りの英語で「行儀よくしなければ駄目だ」と、いきなり言い放ったのですから…

次の日…ジープの停まった音がして…昨日の六人のアメリカ兵が、ダンボールの箱ふたつ担いで現れたのです。アメリカ訛りで話す彼らは、祖母の淀みない完璧な英語を聞いて魂消たまげたようでした…「病気の子供にこれを食べさせてあげてくれ…」…今になってその時のことを思い出しても、その六人のアメリカ兵の話し方と振舞いには、祖母に、親しげな仲にも毅然としたものがあったのと、格調ある英語を話したからだと思います…
(安部, 1998)

梶原ウメは1957(昭和32)年逝去する。生前彼女は、次女の玉枝に(おそらく玉枝が神戸安部家に嫁ぐに際して)、本書の由来について詳しく説明しながら、大切な“父の形見”を託したものと想像される。

7. 度重なる偶然

2002年秋、米国のUMASSを金が訪問して当地に保管されるライマン資料を調査し、帰国直後に開催された地学史研究会において、その調査結果を速報したところ、浜崎が金の眼前に一冊の本を差し出した。「神田の古本店で売られていたものを購入しました。ライマンのサインとありますが如何でしょう?」(すでに1990年に購入していた本であったが、その間浜崎はそれがライマンの贈呈したものであると考えては



J. Shimada Esq.
with the best regards
of his friend
Benji Smith Lyman
Yedo, Jan. 1877.

第5図 島田本の表紙裏見返 ライマン署名。

いたが、なぜ島田宛の寄贈本が残されていたかの疑問が解けずにいた。金がライマンの事跡を調査していることを知り、とくにライマンの野帳を題材としていることから、本書の来歴に関わることを訊ねようと島田本を地学史研究会に持参した。そのとき浜崎は安部譲二著「秋は滲んでいた」を示し、出席者に島田と安部譲二との血縁関係を紹介した)…。

ライマン自筆による野帳記載解読のために数年の間格闘していた金の見定めによれば、確かにそれはライマンの筆跡に相違なかった(第5図)。

金とライマン野帳との出会いは米国在住のライマン研究者である副見恭子氏から「…(米国では)誰も読めない。あなたなら読めるかもしれない…」という私信とともに、1998年、幾枚かのコピーの届けられたことが契機となった。優れた資源地質学者だったライマンの残した野帳の解読に成功したのは、金が偶然、鉱山学(資源工学)と地質学を専攻し、そして彼が秋田で生まれ育ったことによって東北弁を容易に解し、さらにライマンの調査ルートに沿って土地勘があったことによるものだった(金・菅原, 2007)。

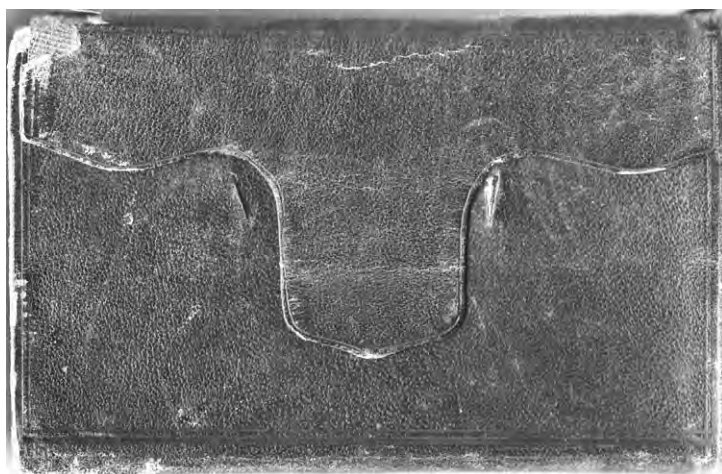
8. 島田本

島田本は皮革装丁(第6図)、背表紙金文字打刻(第7図)、全657ページからなる、判型の割に比較的厚い「土木工学ハンドブック(John C. Trautwine 著 1874年 フィラデルフィア刊)」(第8図)である。

本書は極薄インディアン紙から各ページが構成されることから、辞書と同様に、使用者の頻用した部位が容易に判別出来る。筆者らの観察によれば、島田がしばしば見開いて使用したところは、とりわけ「測量学に関する章」(複数)であった。

巻末にある白紙部(数ページ)には、島田直筆による「スタジア数値表」が丁寧に書き込まれる(第9図)。ハンドブックにはない、島田自身がつくった、当時希少とされた数値群である。スタジア測量に関する興味深い島田の回想がある。

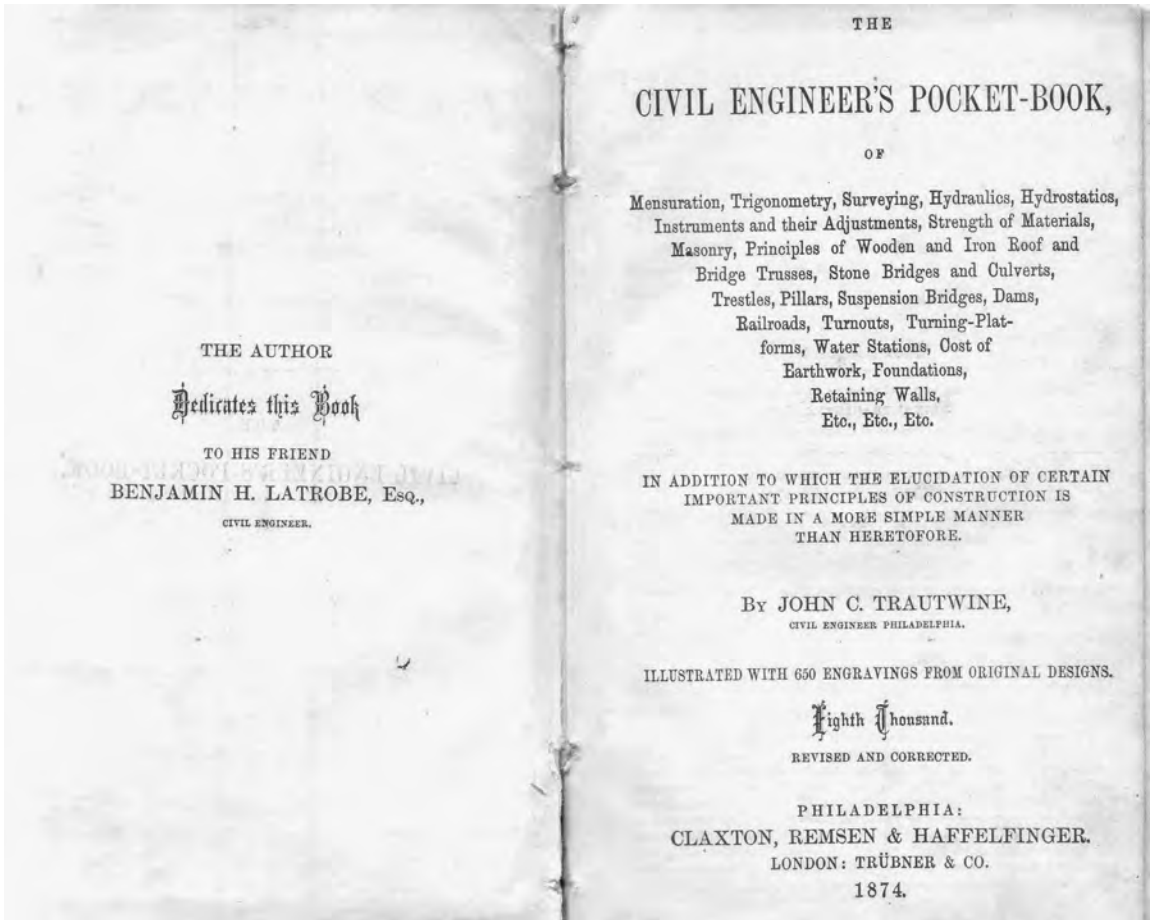
…其頃、測量法でスタジアを讀んで距離を計る計算法は亞米利加のものも不完全であって、先生も未だ完全の方法を知らなかったのを、坂君と私と



第6図 島田本の平面外観。携帯用に装丁される。



第7図 島田本の背表紙外観。金文字によりタイトルが打刻される。



第8図 島田本のとびら。フィラデルフィア刊行(1874年)。初版以来8,000部刊行と記載される。

考察して之を完成し先生をビックリさせた事もあった…
(島田, 1926).

本書がライマンから島田に贈呈されたのは、北海道調査を了えた直後、1877(明治10)年1月1日のことだった。ライマンに実力の高さを認められ、最新版の専門書をプレゼントされた島田は、ますます自身の地質学と測量術に磨きをかけた。結果、不幸なことに30歳にして片脚を失った後も、ライマンに伝授された学問と技術が彼の人生を支え続けることになる。ライマンこそ、本書を与えることにより島田の人生における“真の恩人”となったのである。

島田純一→梶原(旧姓 島田)ウメ→安部(旧姓 梶原)玉枝と、世代を継いで本書が大切に扱われ続

けたことは、その保存状態より一目瞭然である。本書の出処は現在のところ不明である。ただし、玉枝の逝去が1983(昭和58)年9月20日であったことから、本書が売却されたのは、それ以降だった可能性が示されよう。この推論は、本書が古書店の店頭に並べられた時期と矛盾しない。おそらく大量の書籍が処分されたときに、まとめて処分されてしまったものと想像される。

本書を購入した側(古書店主?)がライマンについて詳しく知らず、かつライマン→島田純一→梶原(仲治)ウメ→安部(正夫)玉江→安部譲二という系譜と人脈の続くことに思いが至らなかったため、本書は店頭で平積みされ、^{れんか}廉価で売却されたものと推定される。島田家と梶原家さらに安部家にとって、それぞれ“家宝”であったはずの島田本を、果たして誰が、

MEASUREMENT BY A STADIUM

34	37	896	13	13	26	946	
35	38	894	13	27	13	35	944
4	27	892	13	36	13	43	942
5	8	890	13	56	14	4	940
5	44	888	14	5	14	16	938
6	17	886	14	19	14	32	937
6	48	884	14	33	14	45	935
7	16	882	14	46	14	59	933
7	42	880	15	0	15	12	932
8	7	878	15	13	15	25	929
8	31	876	15	26	15	38	925
8	54	874	15	38	15	56	928
9	15	872	15	51	16	3	923
9	36	870	16	4	16	16	921
9	57	868	16	16	16	27	919
10	14	866	16	28	16	39	917
10	35	864	16	40	16	51	915
10	54	862	16	52	17	3	913
11	12	860	17	4	17	16	916
11	29	858	17	16	17	26	916
11	46	856	17	27	17	38	914
12	3	854	17	39	17	49	909
12	19	852	17	50	18	0	904
12	35	850	18	1	18	11	902
12	51	848	18	12	18	22	899
			18	23	18	33	898

第9図 島田本の652ページ.

いかような経緯により古書市場へリリースしたのか、その解明は今後の課題としたい。

本論をまとめるにあたり貴重なご教示をいただいた元地質調査所地質部の故今井 功博士、UMASS資料(第4図)をご提供いただいた副見恭子氏、写真画像(第2および第3図)の転載を快諾いただいた実業公報社、PHP研究所、そして安部譲二氏に対し深甚なる謝意を表す。

【追記】

調査により、このTrautwineの工学書が永年にわたり多数のエンジニアに愛用された定評ある便覧であったことがわかったので、以下補筆する。

本ポケットブックは、当時の類書中において最も普及したもので、土木工学の“バイブル”と呼ばれ、2008

年までリプリントを含め20版以上の異なる版が刊行され続けている。丸善の「明治100年記念洋書(学術書)展示会」においても、同書は工学書のロングベストセラーとして取り上げられている(丸善, 1968)。

地質学・鉱物学分野ではJ. D. Dana, Sir A. Geikieの著作が同じリストに登場していることから、Trautwineの著書も、土木技術の専門書として永年に亘り確固たる地位を占めてきたことが確認される。

当然のことではあろうが、札幌農学校(北大の前身)の所蔵書目録に1873年版の同書が「タラウトキン土木師袖珍書」として所蔵されていたことが記録されており、所蔵数全3冊とある(北海道大学, 1981)。開拓使の英文年報にも、1877年以降購入された図書として、同書の所蔵記録が記載される(Kaitakushi, 1878)。北大となってからは、1874年版と1895年版のほか、1919年に発刊された20版の所蔵記録がある。

また、北大土木専門部図書を引き継いだ室蘭工業大学図書館は、本書の1888年版を所蔵し、そのタイトルページの写真をweb公開している(<http://mitlib.lib.muroran-it.ac.jp/collection.html>)。

とりわけ関心を惹かれることは、内村鑑三が本書を所蔵していたことである。内村鑑三旧蔵本(1883年版)は国際基督教大学(ICU)図書館に「内村鑑三記念文庫」として所蔵される。彼がアマースト大学在学中に、米人女性Miss. A. T. Cambyから5ドルのプレゼントを受けた際、その厚志を記念して本書を購入した旨を、自筆により扉書きしている(<http://www-lib.icu.ac.jp/Uchimura/index.htm>)。ライマンの門弟たちへのプレゼント事例を髣髴とさせ、当時米国北東部ニューイングランド地方において慣習とされた、美しい寄付行為事例として注目される。

また、米国University of HoustonのLienhard教授が、本書を題材としてまとめた、興味深い技術史エッセーを彼のHP上で公開している(<http://www.uh.edu/engines/epi895.htm>)。1906年に刊行された18版(1,100ページ)の余白ページに書きこまれた土木技術者の自筆メモを画像で紹介しながら「…本当に有用な便覧は所有者自身が必要とするデータを付け加えた手製本(ハンドメイド)であるべきである…」と指摘して、Trautwineの名著を流麗な筆致により紹介したものである。まさに島田がスタジア表を書き込むことによって、ライマンの厚志によるプレゼントを更に有用なものとした事例と相似する活用方が語られる。

洋の東西を問わず技術者の指向性が共通することは、実に興味深い。

著者John C. Trautwine (1810-1883)の肖像は、WEB上の画像ライブラリーに公開されている (<http://www.picturehistory.com/>)。

現代において、1883年発行された同書復刻版は、原本とは異なるペーパーバック装丁により米国のKessinger社より販売され続けている。

さらに、同書の翻訳が1899(明治32)年、片倉喜三郎により「袖珍工師必携」第一編(鉄道編)として、建築書院から発行されている事例が挙げられる。訳本の校定者は後に満鉄総裁を務める野村龍太郎である。これは鉄道関連部分のみの抄訳であったとはいえ、同訳本が日本土木技術史上において多大な影響を与えた証左である。同訳本は、国立国会図書館の近代デジタルライブラリーにおいて公開されている。

文 献

- 安部譲二(1998):秋は滲んで見えた、PHP研究所, 310p.
団 琢磨(1926):思ひ出す事ども-其頃の三池と筑豊-, 石炭時報, 1, 599-608.
副見恭子(1990):ライマン雑記. 地質ニュース, no.427, 54-57.
副見恭子(1992):ライマン雑記(8). 地質ニュース, no.459, 56-60.
副見恭子(1999):ライマン雑記(17). 地質ニュース, no.541, 54-60.
浜崎健児(2002):明治の鉱物学教科書(和本)に影響をあたえたドイツ鉱物学者について. 地質学史懇話会会報(JAHIGEO Bulletin), no.19, 35-37.
浜崎健児(2006):トパーズは帝国の石? 地質学史懇話会会報(JAHIGEO Bulletin), no.27, 25-27.
北海道大学(1981):北大百年史 札幌農学校資料(一), 867p.
今井 功(1963):地質事業の先覚者たち(4)炭田・油田開発の貢献者-ライマン-. 地質ニュース, no.101, 29-35.
今井 功(1966):黎明期の日本地質学. ラティス社(丸善), 193p.
今井 功(1979):日本最古の広域地質図「日本蝦夷地質要略之図」. 地質ニュース, no.303(口絵).
今井 功(1982):地質調査所ができるまで. 地質調査所百年史, 1-14.
今津健治(1979):B・S・ライマンの弟子たち-修行時代-, エネルギー

- 一史研究, no.10, 96-117.
Kaitakushi (1878): Second Annual Report of Sapporo Agricultural College. 171p.
片岡喜三郎訳(1899):ジョン・シー・トラウトワイン著袖珍工師必携第一編(鉄道編). 建築書院, 214p.
金 光男(2003):ライマンの贈りもの. 日本地質学会第110年学術大会(静岡)講演要旨集, 525.
金 光男(2007a):名著『黎明期の日本地質学』(ラティス 1966). 地質学史懇話会会報(JAHIGEO Bulletin), no.29, 11-13.
金 光男(2007b):ライマン「日本蝦夷地質要略之図」彩色指定稿. 日本地質学会 News, vol.10, no.12(表紙).
金 光男(2008):お雇い外国人地質学者の来日経緯(1)ブレイクとパンペリー. 地学教育と科学運動, no.58・59(合併号), 37-42.
金 光男・紺谷吉弘(2008):「開拓峠」は何処か? 日本地質学会第115年学術大会(秋田)講演要旨集, 161.
金 光男・菅原明雅(2007):ライマン鹿角を行く-ライマンの野帳から読みとれる彼の開拓期地質調査とヒューマニズム-. 秋田県立博物館研究報告, no.32, 1-18.
桑田権平(1937):来曼先生小伝. 私家本(三省堂印刷), 99p.
丸善(1968):明治100年記念 洋書100年展 目録(1868-1968). 136p.
西山正吾(1926):北島炭業の創始-ライマン氏の功績-, 石炭時報, 1, 270-272.
島田純一(1926):ライマン先生-弟子の観た先生-, 石炭時報, 1, 157-160.
鈴木 醇(1949):北海道鑛業開拓者ライマン先生の業績. 北海道鑛山學會誌, 5, 279-289.
鈴木尉元・小玉喜三郎(1990):ライマン・コレクションを訪ねて. 地質ニュース, no.427, 49-53.
Suzuki, Y and Kim, K (2003): Benjamin Smith Lyman's Contributions to Japanese Geology. JAHIGEO Newsletter, no.5, 2-5.
徳永重元(2001):ライマンと大鳥圭介. 地質学史懇話会会報(JAHIGEO Bulletin), no.17, 28-29.
Trautwine, John C. (2008): The Civil Engineer's Pocketbook (1883ed. Reprint). Kessinger Publishing, 726p.
上野益三(1968):お雇い外国人③ 自然科学. 鹿島研究所出版, 258p.
矢部長克(1953):明治時代の日本における地質学. 日本地質学会史, 日本地質学会60周年記念, 36-44.

KIM Kwang-Nam and HAMAZAKI Kenji (2009): A book presented to Shimada Junichi from Lyman.

<受付:2008年10月30日>